

人権情報誌

あい・ゆ

I・YOUきょうと

わたしとあなた……。
それぞれが「愛」と「優」の心をいつも大切に
たがいを認め、支え合うまち・京都を。

KYOTO

2004.5
vol.16



●ヒューマンボイス — 2

本当の
バリアフリーは
心の中にある壁を
取り除くことだと思う



バリアフリー推進コンサルタント 石川大輔さん・ミカさん

●特集 — 5

新しい人権学習のかたち
ワークショップ形式による和い輪い人権学習会

●人 輝いてまーす! — 10

音楽を通して
心のつながりを広げたい

「光の音符」代表 西村ゆりさん

●こんなこと・あんなこと みんなの広場 — 11

本当のバリアフリーは
心の中にある壁を
取り除くことだと思う



バリアフリー
推進コンサルタント

石川大輔さん・ミカさん

共に車いすの生活を送っている石川大輔さんとミカさん夫妻。
心の壁をなくし、バリアフリーを広めるために、二人一緒に全国各地での講演や執筆活動をしています。
普段見過ごしてしまいがちな障害のある人からの見方や感じ方を、
自分たちの体験に基づいて語る事が多くの人たちから共感を得ています。
難しく考えないで、自分たちのありのままの姿を知ってもらうことによって、
一人一人の人間を尊重する心を知ってほしいという石川さん夫妻。
様々な人たちとの出会いを通して、障害のあるなしにかかわらず、
みんなが暮らしやすい社会が実現することを望んでいます。

お互いに出会うことで
自分たちの障害を受け入れることができた

大輔さんはミカさんに会って変わりました

僕は生まれた時から障害と共に育ってきましたが、妻は人生の途中から車いすで生活するようになりました。実は、妻と出会うまで、僕は車いすに乗ることを避けていました。とても苦しく、バランスを崩しながらも、無理をして歩いていました。車いすに乗ることを、心のどこかで恥ずかしいことだと思っていたんですね。初めてのデートの時でした。彼女を迎えに行ったら、アパートの部屋の前に止めてある誰も乗っていない彼女の自動車の中に、彼女の車いす

だけが積んでありました。どうやって出てくるんだろうかと、部屋のドアを食い入るように見つめていました。すると、ドアがガチャンと開いて、彼女が這うようにして出てきたんですよ。その姿を見て、本当にドキッとしました。でもその時、歩くことにこだわっていた自分に初めて気が付いたんです。障害というものを頭では分かっていたも、現実の自分と向き合おうとしてこなかった。何だかすごく恥ずかしい気持ちになって、価値観が180度変わりました。僕は車いすに乗ることで、初めて自分の障害と向き合うことができたと思います。
この出来事がなければ、今の僕はいないかもしれません。

Daisuke & Mika Ishikawa

ミカさんも大輔さんに会って変わりました

私は腕の力が弱く、車いすの載せ降ろしができなかったのです。だから、その時も本当は這っていたわけではありません。コロが付いている(スケートボードのような)板に乗っていたんです。これは知り合いの元大工のおじさんが作ってくれたものです。
私は大輔さんと会って、人としゃべれるようになりました。元々人と話すのはたいへん苦手でした。会話ができず、なかなか友達ができませんでした。それでもケガをする前は、自由に動くことができたので困ることはありませんでした。それが車いすに乗るようになって、人の助けが必要な生活になってしまいました。でも声を掛ける勇気がないから、色々なことをあきらめてしまいました。「どうせ、けがをした私が悪い。運が悪かった。私さえあきらめ



ればいいんだ」と、自分に言い聞かせ続けてきたのです。
そのことを彼に言ったら、「君は階段から落ちたことは運が悪かったと言うけれど、僕みたいに生まれつきの病気や幼い頃から障害と共に育った者は、運が悪かったという言葉では片付けることはできないよ」という言葉が返ってきました。生まれつき障害のある人の未来を閉ざすようなことを私は言ってしまった、と反省しました。それからは、勇気を出して人に声を掛けることができるようになりました。彼と一緒にいると彼に頼りがちですが、「今日は自分で言えよ」とか言われて、私もだんだん人と話すことができるようになってきました。

助けが必要な時に「助けて」と言い合える
きっとそこからバリアフリーの輪が広がっていく

ミカさんはバリアフリーは人の役割が大切だと考えています

旅先で素敵なレストランを見つけたんです。でも、たった二段の階段のために車いすでは中に入れない。レストランからはデミグラスソースのおいしい匂いがしてくるし、もうあきらめ切れなくて、二人でずっと入り口の前で手を振り続けていました。しばらくするとドアが開いたので、やっと気付いてくれたと喜んでいたら、「ごめん。うちは、バリアフリーじゃないんです」と言っていて、ドアを閉



められてしまいました。
私たちはおいしいものを食べたかっただけで、バリアフリーを求めていたわけではありません。ただ、ちょっと手を貸してほしいだけなんです。困った時には「お互いさま」と言って助け合えることは、どんな立派なバリアフリーよりも、私たちにとってはうれしいんです。

大輔さんとミカさんは二人で講演や旅行に出掛けます

ホームで電車を待っていると、必ずといっていいほど駅員さんが近付いてきて、「介助の人はいないのですか」と尋ねます。「私たち二人だけです」と答えると、げんなりした顔をし、「君たちだけで大丈夫？ 介助の人がいないと危ないから、気を付けてくださいね」と言われます。
また、バリアフリーといわれている施設や設備だって、まだまだ障害のある人だけで使えるようなものが少ないですね。介助の人がいて初めて使えるものが多いです。目に障害のある友人が買い物をしていて、お店の人が介助の人におつりを渡したのが悲しかったと言っていました。「私はいくらかということを知ってお金を渡しました。

そして何より、私が自分の財布から払ったんだから、やっぱりおつりも私に返してほしかったわ」と言っていました。社会全体が、私たち障害のある人も一人の人間として認めてほしいんですよ。

障害のある人は不幸な存在だ... そんな思いがなくなってくれたらいいな

障害のある人も一人一人違うと大輔さんは言います

二人で活動する理由は、障害者に至る経験や性格、男性と女性の違いなど様々な違いを伝えたいからです。言葉では人はそれぞれ違うとか言っているけど、実際はそう思われていないことが多いんですよ。例えば、「友達とお酒を飲みに行くのが好き」と話すと、周りの人が驚きます。お酒を飲みに出掛けるという行為が、障害のある人へのイメージからすると、とっぴなことになるみたいです（笑）。慎重しやかに、静かに暮らしているという想像と、現実の僕の言動にギャップを感じられるんですね。それは大切なことだと思います。



それに私たちのしゃべっていることは、障害のある人の意見を集約したものではありません。大切なことは、あくまでも自分たちが経験して気付いたことを語っているだけで、僕という個人の声だということを知ってほしいですね。

障害のある人だって普通の人と同じだとミカさんは思っています

私は、自分が車いすに乗るまでは、車いすに乗った人を全く見たことがなかったんですよ。でも、そんなことってあり得ないことですよ。それはきっと関心がなくて、見掛けても目に留まらなかっただけだと思います。だから私



たちや他の障害のある人たちがどんどん街に出て行き、私たちのような人がいることを知ってもらいたいと思います。私は車いすに乗っていても、おしゃれをしたいし、おいしいものを食べたいし、旅行にだって行きたい。皆さんと同じように楽しく暮らしていきたいと願っています。私たち

のことを知った後で、その人がどこかのお店に行って、「ここに石川さん夫妻が来たら、どうだろう？ 一緒に行けるかな」と考えるようになったという話を聞いた時、知ってもらって良かったなと思いました。

例えば、もしもこの薬を飲んだら障害がなくなると言われても、今の私は飲まない方を選びたいですね。誤解を招くかもしれないけれども、今、治ってしまったら私が私でないような気がするんですよ。私は車いすで生活を送るようになってから、友達がたくさんできて、人とも色々話せるようになりました。今の私は幸せです。だから「障害のある人は不幸な存在だ」という思い込みが、みんなの心の中からはなくなるように、これからも二人で力を合わせ、色々な人と出会い、話をしていきたいと思っています。

Profile

石川ミカ（いしかわ・みか）

1969年山口県生まれ。山口芸術短期大学を卒業後、損害保険会社へ入社。1995年、通勤途中に駅の階段から転落し、頸椎を損傷。車いす生活を余儀なくされる。1999年、山口県立大学社会福祉学部に入学。大輔さんと出会い、2000年に結婚。現在、バリアフリー推進コンサルタント、バリアフリーゆかたプロジェクト事務局長として活躍するほか、山口市地域福祉計画策定委員、山口県県民活動審議会委員などを務める。



著書：石川ミカ『車いすのリアル』（大和書房刊・2003年）、
石川大輔・石川ミカ『お互いさま！宣言』（太陽出版刊・2003年）

HP：<http://www.c-able.ne.jp/daisuke/contents.htm>

Profile

石川大輔（いしかわ・だいすけ）

1968年山口県生まれ。生後間もなく、筋ジストロフィー症と診断される。四国学院大学社会福祉学科を卒業後、生活協同組合に就職。2000年、山口県立大学大学院健康福祉学研究科に入学、ミカさんと出会う。現在、バリアフリー推進コンサルタントとして講演活動等を行うほか、山口県地域リハビリテーション構想推進協議会委員、山口市交通まちづくり調査研究会委員、山口県立大学看護学部非常勤講師などを務める。

新しい

人権学習の

かたち

ワークショップ形式による

和い輪い人権学習会

「人権を大切にする」…皆さんは普段の生活の中で「人権」をどのように意識しておられますか？

「頭では分かっているけど、人権を大切にするために、一体何をすればよいのだろうか?」「そんな疑問を持ってもらえる方もいらっしゃるかもしれません。」

今回の特集は、ワークショップ形式で学ぶ「和い輪い人権学習会」(平成15年度実施)の様子をご紹介します。

学習会に参加した皆さんからは様々な体験を通して「人権」について考え合う中で、たくさんのご事に気付いたという感想が多く寄せられています。ワイワイ楽しい雰囲気で行われた学習会の一端を覗いてみましょう。



*ワークショップ

もとは共同作業場とか工房という意味。最近では様々な立場の人が集い、お互いの考えを出し合ったり、共通の体験をしながら、一つのものをつくっていくような作業や学習方式のことをいうことが多い。参加型の研修や学習の分野でも一つの有効な手法として注目されている。

わいわい 人権学習会 体験レポート

この「わいわい人権学習会」は参加者の皆さんに地域や職場における人権啓発のキーパーソンになっていただこうと平成15年7月からおおむね月1回 全8回の連続学習会として実施しました。

この誌面では、その中から5つの学習会の様子を参加者の皆さん自身に紹介していただきました。熱心に取り組まれた様子や楽しい笑い声が伝わってきませんか？



楽しかった 大切なことに気付いた

女が男になる / 男が女になる 性役割入替え劇による「異性」疑似体験

6つの班に分かれて、「ある農家で生活の一コマ」や「学生である彼との結婚話」など男女の関係が盛り込まれた出来事を題材にシナリオをつくり、男性が女性役を、女性が男性役を演じる性役割入替え劇を行いました。

みんなが、異性の気持ちになって役を演じるという機会を持つことで、たくさんの気づき生まれ、よりよい男女の関係とは何かということを考えるのに、たいへん効果的でした。



感想 性を入替えた役を演じてみて 相手の気持ちを思いやることの大切さを感じました。実際に劇を演じ 性別にこだわらず、一人の人間として人と接することの大切さを感じることができました。世代によって考え方も違い 人権について幅広く考える良い機会となりました。



傷つく / 傷つける言葉は... 「どんな言葉に傷付いたか...」リレー式インタビューの試み

6つの班に分かれて、「他人から言われて傷付いた言葉」をリレー式インタビューで告白し合いました。リレー式インタビューとは、「語り手」、「聴き手」、「黙って二人の話を聴く者」という役割を、班の中でリレー式に交代しながら、みんながすべての立場を経験していくというものです。最初は少し堅い雰囲気でしたが、慣れるに従って本音で語れるようになりました。



感想 傷付いた人は覚えているが 傷付けた人はそれを忘れていく。また 知らない内に人を傷付けていることもあるので、一人一人が言葉には責任を持つ必要があると思いました。同じ言葉でも ニュアンスや場所 相手によって意味合いが変わることに気付きました。難しいテーマでしたが 色々な角度からアプローチしていくことで 大切なことをじっくりと考える時間を持つことができました。



「他者」と共に暮らすまち 「共に生きるまち」デザインの試み

「ホームレスや外国人労働者が増えてきた」、「SARS患者を受け入れる病院がある」など、人権に関する様々なテーマを抱えた「わいわい市」に、みんなが住むことになりました。まちの中では、自分以外の「他者」と共に楽しく、互いに助け合って暮らすために、みんなで知恵を絞って、それぞれのテーマに対する正しい知識の啓発の方法などについて考えていきました。



感想 この学習会では まちに必要施設についても考えました。みんなが自分たちのまちづくりに希望をふくらませ 素晴らしい施設をつくることができ満足しました。「精神病院の建設予定地がある」というまちでは、「現実の社会の中で 病院と地域住民の間で様々な問題が起きていることから 建設前に 病院側と十分に話し合い 共生する道を見つけていくべき」というような意見が出るなど 仮想のまちのテーマをみんなが現実起こりうる問題として考え 熱心な話し合いが行われました。



どんな音が聞こえますか？ アイマスク目隠しウォークによる「視覚障害疑似体験」



学習会の初めに、音声だけでドラマの登場人物の数などを考え、後で画面で確認する「テレビドラマを耳で見る練習」を行いました。この練習を通して視覚障害について学ぶことができました。

また、視覚障害のある人になったつもりで近くの公園やお寺などで、遊具に触れたり、周りの音を聴いたり、歩いてみたりしました。そんな体験をした後で、実際に視覚障害のある方から、日常生活での様々な体験談などを聴かせてもらいました。

感想 目が不自由で 耳に頼る不安や苦勞など 今まで知らなかったことが見えてきました。テレビドラマを耳で見る練習や アイマスクを付けた疑似体験によって 視覚障害のある方の気持ちに一歩でも近づくことができました。今まで「見える」「聞こえる」ことを当たり前のようにして生活してきましたが 目隠し状態で色々な体験をして 本当に大変なことだと実感しました。



外国人ってどんな人？ 外国人に対するイメージの発表を契機とするディスカッション



参加者が、米国や中国など5つの国の班に分かれて、その国のイメージについて話し合った後、各班に留学生などの外国人が加わりました。それまでのイメージと本人から聞く事実と大きな開きがあることに気付くなど、その国に対する理解を深めました。

また、在日韓国・朝鮮人のことも話し合いました。その中で異なる様々な意見が出たことから、先入観で判断してはいけないことに気付く良い機会になりました。

感想 外国人に対するイメージは テレビなどのメディアの情報だけで理解していたことが分かり 改めて日本という小さな世界に住んでいるということを実感しました。外国人と話し合うことで イメージと現実の垣根を取り除けたことに意味がありました。外国人との相互交流や同じ地域社会に暮らす心構えは 少子化 人口減少の進む日本では、ますます必要になってくると思います。



この気持ち みんなに伝えたい

学習会参加者からのメッセージ

学習会に参加してここが良かった

様々な人と交流ができた

- 初対面の人と交流し、人に対する新しい気持ちが出来ました。(男性・77歳)
 - 色々な人と交流し、考えの違いを発見できました。(男性・56歳)
 - 多くの出会いによって色々な人権を感じることができました。(女性・54歳)
 - 他人と気軽に話すことで理解しようとする気持ちが出来ました。(男性・64歳)
 - 毎回 同じ人権テーマを異なる世代の人たちと学べたことは有意義でした。(女性・40代)
 - 人権について同じような関心を持っている方(仲間)が多くおられました。(女性・62歳)
- ステキな人と出会い、とても良い仲間になった**

ワークショップが楽しく体験できた

- みんなで意見を出し合い話し合うことが楽しかったです。(女性・30歳)
 - 年齢や性別に関係なくみんなが集うワークショップを大いに満喫しました。(女性・62歳)
 - 意見を否定せず議論する流れが良く、無意識に積極的に参加していました。(男性・30代)
 - ワークショップで色々な意見を聞いて京都の良い面も悪い面も覗けました。(女性・61歳)
 - 毎回グループごとに様々な課題に取り組んだことは良い経験になりました。(男性・71歳)
 - 初めての体験で毎回ハラハラドキドキ!楽しさいっぱい学習会でした。(女性・50代)
- 積極的に参加(行動)して良かった**

視野が大きく広がった

- 今まで知らなかったことに目を向けるきっかけとなりました。(女性・50代)
 - 色々な人の意見を聴くことから自らの考えが広がりました。(女性・50歳)
 - 漠然としたイメージしかなかったが、具体的に考える良ききっかけとなりました。(女性・28歳)
 - 頭で分かっていたけど実行できませんでしたが今後人権問題を身近な問題として考えたいです。(女性・74歳)
 - すべての基本は住民主体の原則 平等の精神によることを感じました。(男性・77歳)
 - 毎回大切な課題や問題に向き合うことで色々な気づきがありました。(女性)
 - 障害のある人の身になって行動することの大切さを再認識できました。(女性・60代)
- 人権について気づき、具体的に考えるきっかけができた**

人権を守る大切さ ~あなたに伝えたいこと~

【気づく】 人権課題に気づく大切さ

- 何気ない言葉でも傷付く人もいるかもしれないということを忘れないで。(女性・40代)
- 人権問題は一部の人が取り組むものではない。みんなそのことに気づいて。(女性・30代)
- 人間一人一人は平等であり、一人一人は大事な人間です。(女性・50代)
- 家庭など身近な日常生活の中で何が人権問題なのか気づくことが大切です。(女性・54歳)
- 自分にとって何でもないことを他者(他人)の立場で見つめ直すことで多くの気づきが生まれます。(女性)

【学ぶ】 人権を学ぶことの大切さ

- 人権を学ぶことで正しい知識を習得し、理解することが必要です。(男性・56歳)
- 日々の暮らしの中で気付いた差別や偏見に対して学ぶことにより人に説いていきましょう。(女性・28歳)
- 身体や精神に障害がある人の人権の課題について改めて学習会で学び勉強になりました。(女性・60代)
- 疑問を持ったら、できる範囲で調べ知識を増やしてください。偏った考え方は見えないこともありますよ。(男性・30代)

【考える】 人権について一人一人が考えることの大切さ

- 一度周りを見てください。身体に障害のある方の存在に気づくはずですが、その方たちのことをじっくりと考えてみましょう。(女性・62歳)
- 行動に移す前に、じっくり考えることで、みんなと情報交換し合うための材料を集めていきたいです。(女性・61歳)

【行動する】 人権を守るために行動することの大切さ

- 社会的に立場の弱い人の気持ちを理解し、できることから始めましょう!(男性・60代)
- 人権が気になった時、もう一歩進んで、できる範囲で行動していこう!(女性・50歳)
- もっと施設を増やして 障害のある人のご家族が安心できるような地域にしていきたいです。(女性)
- 人権を尊重するために行動することは平和につながると思います。(男性)
- 人権が尊重される社会に向けて私一人からでも始めたい。行動したい!(女性・50代)
- 自分の人権 あなたの人権を大事にし、希望ある社会をつかっていくため お互い行動を起こしましょう!(男性・71歳)
- 行動して身体で学んだら絶対に忘れることはないはず。(男性・77歳)



あなたもワイワイ楽しく人権を学んでみませんか!

平成16年度 **和い輪い人権学習会** 募集 **参加者**

内容 申込方法など詳しくは11ページをご覧ください。
問合せ先 / 文化市民局人権文化推進課 ☎222-3381

人 輝いてます!

音楽を通して 心のつながりを広げたい

西村ゆりさんが代表を務める「光の音符」では 病院や高齢者施設を訪れてコンサートを開催する傍ら ハンセン病療養所の入所者の人たちとの交流活動を積極的に進めています。

最近では海外にも目を向け、インドに住むハンセン病患者さんのお子様たちやスラムのお子様たちのために 教育センターを建設しようと頑張っています。



インドで子どもたちの前でコンサートをする西村さんたち
(立っている方の右から3番目が西村さん)

西村さんが音楽家の仲間と共に「光の音符」を結成したのは 今から10年前のことです。「多くの人たちに音楽の素晴らしさを知ってもらいたい」と考えたのがきっかけでした。視覚に障害のある人のために コンサート用の点字プログラムを作成するほか 会場に来られない人たちにも音楽を楽しんでもらえるよう 病院や高齢者施設を訪ねて出張コンサートを開くなど 積極的な音楽活動を行っています。

「ハンセン病の療養所の夏祭りに行きませんか」。メンバーの一言から 西村さんと療養所の入所者の人たちとの交流が始まりました。国立療養施設の一つ 岡山県の邑久光明園を初めて訪れた時 西村さんはこれまでに経験したことのないほど心に強い印象を受けました。「そこはまるで社会から隔絶された場所という印象を受けました。ほとんどの人が偽名を使い 肉親にも会えないという状況でした」。平成8年に「らい予防法」が廃止され 法律の壁は除かれたものの 社会とのつながりを取り戻せないでいる入所者の皆さんの孤独を強く感じました。

「ここでコンサートをしたい」西村さんはそう思いました。それにはまず自分たちがハンセン病のことをよく知る必要があると考え 入所者の皆さんからお話を聞かせてもらうことにしました。初めは入所者の皆さんとの間には心の距離がありました。しかしながら、一緒にいることで 少しずつですが 心のつながりのようなものが生まれてきたそうです。

また 入所者の詩人の方が書き綴られた詩に大変感動した西村さんは、それに曲を付けCDを作成しました。「その時の詩人の方の喜びや笑顔が忘れられません。長い間 偏見と差別を受けてきた方の苦しみは到底理解できるものではありません。でも、そのような想像を超えた大きな苦し



オペレッタ上演風景



会場で楽しむ子どもたち

みを知らないで過ごしてきた自分たちを振り返る という姿勢がとても大切だと思うのです」と真剣なまなざしで話してくれました。

西村さんは 様々な活動を通して世界で一番ハンセン病患者が多いインドの現状を知りました。「ハンセン病患者さんのお子様たち 更にはスラムのお子様たちは、インドでは、十分な教育を受けることができません。また 日本のお入所者は子どもを持てなかったという歴史がありました。この将来のあるインドのお子様たちを軸に 日本のお入所者の皆さんとインドのハンセン病の人たちをつなげたい。そのために教育センターをつくりたい」という西村さんの願いから、昨年4月に「光の音符インドプロジェクト」が発足しました。

プロジェクトでは 創作オペレッタ(音楽劇)が上演されました。これは「音楽は国境も民族も超える」というメッセージが込められたオリジナルの作品で 日本とインドの神々が登場するものです。趣旨に賛同する作曲家などがボランティアで協力してくれるなど 人のつながりが生み出すパワーを改めて実感したそうです。最初の上演が行われた邑久光明園では、「インドのお子様たちの育ての親になりたい」という入所者の皆さんの切実な気持ちからたくさんの寄付が集まりました。今年2月には15名のメンバーと共に、念願のインド公演も実現しました。「お子様たちがコンサートに参加するなど みんなで一緒に楽しむことができました」と話す西村さん。

入所者の皆さんが笑顔で共に暮らせる、そんな社会を目指して 日本とインド、そして療養所の内と外にしっかりと根をおろした西村さんの活動はこれからも多くの感動を生みながら続いていくことでしょう。

こんなこと・あんなこと みんなの広場

「人権“ほっと”写真」を募集します

人権の大切さが感じられる心温まる写真を募集します。
ふるってご応募ください(未発表のものに限ります)。



応募の資格・テーマ・作品の規格

応募資格

京都市に在住又は通勤・通学の方

テーマ

「人権の大切さが感じられる心温まる写真」

(例:人を思いやる心 人と人とのふれあいのすばらしさ 生きていることのすばらしさ 人への感謝の気持ちなどが伝わってくる写真)

作品規格

カラープリント四つ切り(組写真及びワイドは不可)。
デジタル写真の場合は 加工・修正不可。

応募作品については、上記の作品規格以外にも
何点かの規定があります。応募される時は、
必ず右記までお問い合わせください。

JINKEN
HOT-PHOTO

入選作品への賞

入選15点

ほっとフォト賞 5点 賞状と副賞(図書券3万円分)
佳作 10点 賞状と副賞(図書券1万円分)

応募方法・応募先・募集期間

郵送又は持参で、
〒604-8571

京都市人権文化推進課「ほっとフォト募集」担当
平成16年7月31日(土)(当日消印有効)まで

問合せ先

文化市民局人権文化推進課 ☎222-3381

ツラッティ千本特別展

きたけんのまちと
子どもたち

「きたけんのまち」(嘉楽・旭丘中学校区)を舞台に進められてきた主として子どもたちのまちづくりにかかわる活動や教育実践をパネルや写真などで紹介しています。

期 間：開催中(5月29日(土)まで)
10:00~16:30

休館日/日曜日 祝日 第2・4土曜日

場 所：ツラッティ千本(市バス「千本北大路」下車すぐ)

入場料：無料

問合せ先/ツラッティ千本

☎493-4539

楽只コミュニティセンター ☎492-7320

平成16年度

わいわい輪い人権学習会の募集

[内容(予定)] メインテーマ「他者の気持ちに思いを馳せる」

回	開催日(いずれも木曜日)	テーマ	学習テーマ
1	16年7月29日	色んな人の色んな気持ち	人権一般
2	8月26日	手・身体・表情で語り合おう	障害のある人
3	9月30日	「緑色の病」が広がった!	感染症等の患者
4	10月28日	在日外国人はお隣さん	外国籍市民
5	11月25日	字が書けるのって当たり前のこと?	同和問題
6	17年1月27日	ホームレスは身近な人	ホームレス
7	2月24日	他者と出会う社会を生きよう	人権一般

日 時 平成16年7月29日(木)から17年2月未まで 全7回
木曜日 午前10時~午後4時

場 所 ウィングス京都(中・東洞院六角下る)ほか

募集対象 原則として市内在住の方で7回全部に参加できる方

募集人員 40名程度(多数の場合は抽選)

参加費 無料

ハガキかFAX(住所・氏名・年齢・電話番号を明記)

又は電話で6月30日(必着)までに下記までお申し込みください。

〒604-8571 京都市人権文化推進課「人権ワークショップ」担当

☎222-3381 FAX 222-3194

憲法月間 [各区役所・支所の催し]

事前申込不要 手話通訳あり(映画を除く) 入場無料

5月	日時・場所	内容など 詳しくは各区役所・支所のまちづくり推進課までお問い合わせください。	
13[木]	14:00~ 池坊学園 こころホール 定員200名	人権を考えるつどい 講演と演奏:「琴とともに歩いてきて」 出演:京都府視覚障害者協会音楽部の皆さん	下京区役所 まちづくり推進課 ☎371-7101
14[金]	16:00~ 船岡山公園	人権啓発パレード コース:船岡山公園からキタオオジタウン(北大路通) 参加者:京都市消防音楽隊ほか	北区役所 まちづくり推進課 ☎432-1181
16[日]	13:30~ 京都エミナース 定員300名	憲法月間のつどい 講演:「家族」という物語 子どもの権利 家族の権利 講師:団士郎さん(家族療法トレーナー 立命館大学大学院教授 漫画家)	西京区役所まちづくり推進課 ☎381-7121 洛西支所まちづくり推進課 ☎332-9318
23[日]	13:15~ 元教業小学校 定員150名	人権のつどい 講演:「ハンセン病と入所者の人権」 講師:山本英郎さん(国立療養所邑久光明園入所者自治会会長)	中京区役所 まちづくり推進課 ☎812-2426
26[水]	14:00~ 西陣織会館 定員350名	映画のつどい 映画:「アカシアの道」	上京区役所 まちづくり推進課 ☎441-0111
27[木]	13:30~ 左京区役所 定員200名	人権講座 私たちと人権 講演:「子どもの加害行動を考える」 弱者としての子どもの人権を守ることとは 講師:定本ゆきこさん(京都少年鑑別所法務技官 精神科医)	左京区役所 まちづくり推進課 ☎771-4211

* なお 既に事前申込の期間が終了しているなどの理由で 掲載していない催しもありますのでご了承ください。

2004年度 **人権大学講座** 受講生募集

講義のほかに ワークショップやフィールドワークなどによって 今日的な視点で 人権について考える講座です。

6月8日[火]~11月10日[水] 全12回

時間 13:30~
場所 キャンパスプラザ京都(下・西洞院塩小路下る)
受講料 20,000円(年間), 2,000円(1回)
*1回のみ受講も可

2004年度 **講座・人権ゆかりの地をたずねて**

名所・旧跡が多い私たちのまち京都。そこで繰り広げられた人間模様を素材に 人権の視点も加えて 京都の歴史や文化を学ぶ講座です。

開催日と講座テーマ(開催日/いずれも土曜日)

- 5月15日 北野天満宮に集う人びと 室町時代から江戸時代初頭を中心に
- 6月12日 千本釈迦堂・ライトハウス
- 7月10日 祇園社と犬神人
- 8月7日 秦氏と伏見稲荷大社
- 9月11日 坂本龍馬と勝海舟 立憲政体と三国同盟論の先駆け
- 10月9日 空也堂 三味地を寒行した有髪の僧たち
- 11月6日 西陣の仕事と風俗 戦前の京文化の社会的基盤について
- 1月8日 高野新笠 桓武天皇の生母の実像

時間 14:00~15:30 **受講料** 1,000円(1回)
場所 池坊学園(下・室町四条下る) *1回のみ受講も可

問合せ先/(財)世界人権問題研究センター
〒604-0857 京都市中京区烏丸通二条上る蔭絵屋町263 京榮烏丸ビル7階
☎231-2600 FAX 231-2750

講演と映画のつどい

講演:「夢追いかけて」
講師:河合純一さん(パラリンピック水泳競技金メダリスト)
映画:「夢追いかけて」

日時/平成16年7月25日(日)午後1時30分~
場所/右京ふれあい文化会館
定員・申込等/450名, 事前申込不要 無料
問合せ先/右京区役所 まちづくり推進課 ☎861-1101

同じです あなたとわたしの 大切さ

ひと・まち・ロマン  元気都市・京都

発行日 平成16年5月1日
発行 京都市文化市民局市民生活部人権文化推進課
〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る
上本能寺前町488番地
☎075(222)3381
<http://www.city.kyoto.jp/bunshi/jinken/>
京都市印刷物第163009号

編集後記/今号の特集は多くのページを使ってワークショップ形式による人権学習会についてご紹介しました。全8回の学習会を実施してみて 人権に対する考え方や人権の大切さを伝える方法は 人の数と同じだけあるということを実感することができました。人権啓発の仕事をしていると、できるだけ多くの市民の皆さんに人権の大切さを考えてもらおうということに気を取られがちになることがあります。学習会での経験を生かし 市民の皆さんお一人お一人の個性や考え方を尊重し 真心を込めた人権啓発ができるよう心掛けていきたいと思っております。(KEN)

本誌は 年3回(5月 8月,12月)発行します。区役所・支所のまちづくり推進課 市役所の市政案内所ほかで配布しています。郵送をご希望の方は 返信用切手(140円分)を同封のうえ 京都市人権文化推進課までお申し込みください。